

# 釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 10

# 自然回帰 鹿島釣狂

## 釣れぬサケのイクラ算用

息子が私に「サケ釣りに行かないのか」と聞いてくる。「行くつもりはない」と応えたものの、どうしてそんなことを聞くのか。先日、息子用の竿とリールを買ったこと覚えていたようだ。明日は息子の休日で、行きたいようだった。「行くか?」と聞くと二つ返事で頷いた。餌は前回の分が残っている。ガソリンも満タンだ。出発を0時半として準備を整えておいた。息子は早めに床についたが眠れなかったようだ。昔の自分のようだ。私は2時間ほどぐっすりと眠った。釣りに行く前夜は眠れないものだ。息子は絶対釣れるという確信めいたものがあつたようだ。「捕らぬ狸の皮算用」ではなく、「釣らぬサケの筋子算用」だったのだろうか。

10月1日、2時半には増毛町箸別に着いた。駐車場には車が1台しか停められていない。慌てる必要はないだろう。余裕を持って一休みした。しかし、する事もないので釣り場へと向かった。何と、河口には既に若者軍団が6名揃っており、その右側にも投げ釣り師の竿が並んでいた。釣れているからなのだろうか? 波は1.5m程で少し高い。

準備をしていると、気の早い若者たちがウキルアーを飛ばし始めた。電ケミを付けたウキが漆黒の海に吸い込まれていく。息子にルアーを選ばせ、ウキはそれにあつたものを見繕った。ケミカルライト50はすぐにすっぽ抜けていった。仕方がないので違うウキに電ケミを付けて渡した。視認性はすこぶるよい。

息子の竿捌きは随分と上達したようだ。購入した12フィートの竿が大柄な息子には合っているのだろうか。付近の釣り人よりウキが遙か沖に飛んでいく。オマツリすることも無い。私も負けじと竿を振った。しかし、息子のウキよりも手前で失速して息子のウキを

越えることはない。午前8時頃まで頑張ったが、サケは誰の竿をも曲げることはなかった。

息子は「サケ釣りに来て釣果がなかったのは今回が初めてだ」と言った。そうだったのか。息子は2010年に初めてサケを釣り、年に1回の釣行では必ずサケをものにしてきたのだ。今回はやっぱり「釣れぬサケの筋子算用」だった。



竿は調子いいのだけれど

## リベンジ成る

市の広報に目を通して見ると、私の家のすぐ近くの総合体育館で毎週水曜日「シニア運動教室」が催されている。60歳以上の男女とある。退職してから運動不足になりがちだ。釣り大会ではこの時とばかりに重い荷物を背負ってあちこちへと彷徨っていることが多いのだが、普段はする事もなくつつい手軽な読書へと手が伸びてしまう。毎日暇なのだから自分で計画して運動すればよいところだがそれが出来ない。

役所に申し込みの電話をしようとしているところで、息子からメールが届いた。明日は休みなのでサケ釣りに行こうというものだ。特別な用事はないのであっさりの方針転換を

してしまった。

昨日まで大荒れで、明後日からは台風21号の影響で海が荒れる予報だ。苫小牧市では臨時休校の措置がとられた。明日はその狭間で天気がよく波も落ち着くらしい。餌のカツオと電ケミ2本、ウキルアーセット1組を購入して、前回と同じように0時半に目覚ましをセットした。

10月7日、高速で深川ジャンクションを抜け、留萌大和田までの無料高速道路を一気に進もうと考えていたのだが深川西インターチェンジで下ろされてしまった。午後10時～翌朝の6時迄工事のため夜間通行止めとなっていた。今日からの措置のようだ。なんだか嫌な予感がしたが、昔よく利用した北竜から増毛に抜ける94号線を選択して行くことになった。高速を使うのと同じような時間で着いた。

すぐに用意して釣り場にむかった。ウキルアー組が4名。ぶっ込み組が2名待機していたが、河口側が空いていたので、そこで夜明けを待つ事にした。

用意が出来ると息子はすぐにウキルアーを飛ばし始めた。私は、今日は釣り人が少ないのでウキ釣りを近投でする事にした。息子は12フィート竿で豪快に飛ばしている。薄暗い内に右隣りが掛けた。ギンピカの雄だった。息子にも来た。ググッと竿が入ったところでまではよかったのだが、掛かりが浅かったのか、バラしてしまった。川向かいの釣り人が掛けた。そしてすぐに息子にも来た。小振りだがギンピカの雄だった。息子が釣ると自分のことのように嬉しい。立て続けに息子に来た。何度か岸近くで走られて苦労していたが、寄せ波に合わせて引き摺り上げると大きな雄だった。魚を取り込むことも様になってきた。またしても息子が掛けた。今度は婚異色のかかった大きなメスだった。腹がはち切れんばかり膨れている。何でも同じところでヒットしているようだ。遠投してから途中でゴツゴツとアタリがあり、同じスピードでリールを回していると、岸近くに並んだ岩の向こう側で引き込みがあるらしい。

すっかり明るくなった。私も10フィート竿にアワビブルー50gのウキルアーを付けて振り込んだ。そのルアーによくゴツゴツとしたアタリが出た。我慢して引き続けていると竿が食い込まずにウキが横に走った。やはり息子と同じ横岩の向こう側で掛かったのだ。グイッ、グイッとウキが走った方向と逆向きにして竿を煽った。これも腹の膨れた大きな雌だった。息子になんとか一矢を酬いることが出来てホッとした。息子がサケを掛けると自分のことのように嬉しいのだが、それが2本、3本となり、私にはアタリも出ないとなるとモヤモヤした気持ちが募っていたのだ。

息子には新品の竿とリールを持たせてある。私のものより高価なものだ。ウキに電ケミを付けて飛ばしていたのだが、ウキとのセットの仕方が甘かったのか2つもなくなってしまった。残った電ケミも息子が使い、私はギョギョライトの薄明かりで視認性がよくなかった。明るくなってしまうと電ケミは関係なくなったが、飛ばす距離が違う。

午前7時にもなるとサケを掛けるものは誰もいなくなった。しかし、息子にまたしても来てしまった。遠投で着水した途端にゴツゴツとしたアタリがあり、巻き続けていると一

気に竿を伸ばされたようだ。明るくなってきたのでサケは沖に行ってしまったようだ。息子が4本、私が1本。息子は、もう十分釣って満足したので釣りをやめるという。

私は、年甲斐もなく息子に用意したはずの竿を分捕って粘ってみた。そして、8時終了の予定を1時間延ばしたが結局、息子の竿を曲げることは来なかった。今日は息子が竿頭のようなようだった。



息子の竿を分捕って最後の足掻きをする



私の1本。他は息子が上げたものだ。



イクラがビッシリと入っていた。いつもはこんなに大きくはない肝もあった。

サケで満杯になったバツカンをなんとか国道まで運んだが、駐車場まではとても運ぶことは出来そうにもない。息子に車をとりに行ってもらって、私は、釣り道具とサケの番兵をすることになった。

高速を走っているときに狐が出た。道路沿いには動物が侵入できないようにと網を張り巡らせてあるのにどのようにして潜り込んだのだろう。高速道路だからといって安全ではないわけだ。

自宅に帰ってから、女房を誘って天然温泉「ゆう&ゆう」に浸かりに行った。風呂上がりには息子と板蕎麦を啜りながら大ジョッキで乾杯した。運転手はもちろん女房に任せた。

持ち帰ったサケは、息子の友だちに2本、お向かいさんに1本、姪っ子家族に1本をお裾分けした。残った1本は自家用にと捌いた。腹に入っていた筋子は醤油漬けにして、今週末、運動会がある孫のところへのお土産にした。そして、いつもは捨てていたサケの心臓を息子がペペロンチーノ風に炒めてくれた。ガーリック、バターをたっぷり使ったそうだ。身の方は白っぽかったが女房がバターで焼いた後に野菜などをたっぷり入れて、ちゃんちゃん焼きにした。またまた、ビールを飲んで二度目の乾杯をすることになった。

## エンルム岬の朝陽

10月17日、岩見沢釣遊会第6回大会が様似港～襟裳港で開催された。様似港にするか。今日は潮回りが逆潮で、着いたときにはエンルム岬の平盤に乗っていることが出来る。櫛の歯状の溝を探りながら潮込みにあわせて徐々に様似港に戻ってくるという釣りを想定してみた。いや白里谷のタカノハもいいな。山中では大アブラコが待っていていそうな気がする。近浦のカジカはどうだ。エリモ港でアカハラをとってから夕日ヶ丘に向かうのが無難かなあ。と考えながらバスの中で情報を集めた。

結局、当初の予定通り様似港で下りた。エンルム岬には乗っていられる時間帯だが、昨日まで続いた時化のため港内に魚が入っているかも知れないぞという思いがよぎり舟揚場で竿を出した。すぐに大きなアタリが出た。やっぱりこの舟揚場に入ったのは正解だったか。しかし、その主はドンコだった。その後、次から次へとドンコばかりが掛かってくる。今まで、この舟揚場に入ってドンコがこんなに釣れることはなかったのだが。ドンコを釣り上げてしまえばカジカがやってくると信じて打ち返した。

釣り上げたドンコは、舟揚場のすぐ脇の石原の上に置いておいた。現在は干潮時だが、潮が込んできたときにはそのまま海にお帰り願おうという思いからだ。釣り上げたドンコを同じようにそこに置こうとしたときだ。鼠がそのドンコを啜って立ち去ろうとしていた。そしてそのままテトラの中にもぐり込んでいった。鼠はどこからやってきたのだろうか。まさかテトラの中に巣を作っているわけはあるまい。そういえば釣り上げたドンコよりも数が少なくなっている。その鼠1匹だけではなく何匹もいたのだ。とにかく、その鼠たちが自然回帰の作業を手助けしてくれたことになった。



ドンコばかりが釣れてくる。鼠がドンコを加えていった。

近投にガタガタと竿を揺らすアタリが出た。ソイだろうか。釣り上げてみるとまた、ドンコのような赤茶色をしている。ギャだった。私にとっては今まで釣り上げた中で一番大きいと思えるような見事な魚体だった。



ガヤ 33 cm

そして、またまたドンコのオンパレードとなった。遠投を試みながら探っていくも、どこに投げてでもドンコなのだ。そんな中、遠投に竿を持ち上げるアタリが出た。右に左にと突き刺さる引き込みはドンコではないだろう。40 cm強のアブラコだった。小さいがクロガシラも上がった。

煌々と光るライトをつけた漁船が洋上 1 kmほどに碇泊して作業を行っていたが、その光がエンルム岬の影に隠れていった。すると、舟揚場の先に見える日高の山々の稜線が蒼茫とした濃紫色に染められてきた。それに連なる漆黒の水平線にもオレンジの色が混ざることになった。何気なく振り返ってみると、エンルム岬の尾根に二人の人影が現れた。その動きをよく見ると私が竿を出している遥か彼方を臨んでいるようである。その人影は三脚を構えだした。もちろん釣り用の三脚ではない。三脚の上にカメラを据え付け、朝陽のシャッターチャンスを狙っているようである。朝陽は一瞬のうちに上った。遥かなる水平線上には、炎が起つように朝陽が燃え、めくるめく光が水平線のみならず、周辺のすべてのものを炎の色に燃え立たせていた。壮大な朝陽であった。眺めていると、その炎の中へ惹き入れられそうな錯覚を感じる。私もエンルム岬のカメラマンと同じようにシャッターチャンスを狙っていたはずだが、その移りゆく変貌に見取れてしまって、シャッターを押すことが出来なかった。カメラマンは立ち去っていた。朝陽は昇った瞬間の感激は強いが、余韻が乏しい。夕陽には力強く輝かしい明日を噛みしめる余韻があるように思う。





日の出前、煌々とライトを付けた漁船が碇泊していた

しばらく朝陽の輝きの中に身をおいていたが、次第に胸の鼓動が高まり、ふつふつと滾るものを覚えた。6時、港内側にあるエンルム岬の付け根へと移動した。まずは外防波堤右の港内側で竿を出した。しかし、2時間経ってもアタリは一度も出なかった。

8時、今度は防波堤の外側の石原で三脚を立てた。そして、櫛の歯状の溝が切れているところに遠投した。しばらく打ち返しているとグイングインと竿先が刺さった。45cm弱のカジカだった。次を期待して時間ぎりぎりまで粘ったがその次はなかった。しかし、審査の結果私は準優勝だった。

優勝は平宇で竿を出した矢根政仁氏だった。狙いはもちろんタカノハであり、若干の移動を試みてはいたが、粘り強くタカノハ場を攻めていった。そんな中、暗い内から大物カジカをものにすることが出来、あとは明け方のタカノハを待つのみとなっていた。瞬いていた星の光も見えなくなり、繋がっていた海と空の境がくっきりとしだした。すると、その水平線上に突き出していた竿先がガクンガクンと大きく揺れたかと思うまもなくピンと突っ立ったままになった。糸ふけが大きく出ている。狙っていたタカノハだった。寄せる波と一緒にその大物を取り込んだ。その後、同じようなタカノハを2枚追加した。そして、竿上げ間近に身長優勝にもなったアブラコ46.1cmを引き抜いたのだった。

3位の片岡氏は、カジカで有名な日本電工前に入った。暗い内はアタリもなく何度か移動を繰り返した。そして、潮が混んできた明け方にカジカを次々とものにすることが出来たのだ。



優勝 矢根政仁氏